NHK広島放送局

永遠に語り継ぎたい

～未来に残す、あのときの記憶～

題字：梶本 淑子

NHK広島放送局
https://nhk.jp/hiroshima

いのちは永遠ではない
けれど、語り継ぐべき
〝記憶〟がある

番組ナビゲーター
加藤シゲアキ（広島市生まれ）

被爆体験継承プロジェクトについて

あなたが大切にしているものは何ですか？
友だち、家族、何気ない日常…？
1945年の夏、広島・長崎のひとたちは、一瞬にして大切なものを失いました。
被爆者の平均年齢は84歳。まもなく“被爆者なき世界”がやってきます。
あのとき、何を見て、何を思い、どんな人生を生きてきたのか―。

当時の記憶や思いを、被爆100年となる2045年の未来の若者にもしっかり伝えていきたい。そんな願いを込め、NHKは国立原爆死没者追悼平和祈念館や、被爆者、若者たちとともに最新の音声認識技術や人工知能を活用し、質問に答えることができる「被爆証言応答装置」の開発に挑戦しました。

「原爆が落ちた瞬間、何を思いましたか？」
「戦時中、恋はしていましたか？」
「生きるのが嫌になった時、梶本さんならどうしますか？」

あなたなら、どんな質問を投げかけますか？

被爆者 梶本淑子さんからのメッセージ

被爆証言者

梶本 淑子（かじもと よしこ） さん

1931年（昭和6年）生まれ

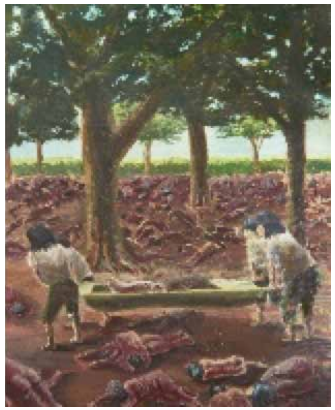
証言撮影時 91歳

広島市発行「広島原爆戦災誌」付録
「原子爆弾被災状況 広島市街説明図」をもとに作製

広島で被爆をした梶本淑子さんが、プロジェクトの趣旨に賛同し、5日間にわたるインタビューに答えてくれました。被爆したのは中学3年生だった14歳の時。爆心地から2.3キロメートル離れた飛行機のプロペラ部品を造る工場で作業中に被爆しました。窓に真っ青な光が見え「爆弾だ」と思った瞬間、建物の下敷きになって気絶しました。友人の悲鳴で気がつき無我夢中で建物から這い出たときに、足と腕が裂ける大けがを負いました。間もなく火災が発生し、歩けない友達を担架に乗せて近くの公園に避難。気づけば、広島のまちは地獄と化していました。梶本さんの父親は、原爆投下から1年半後に亡くなり、母親も病気がちに。「私が何とかせんとみんな死んでしまう…」。弟3人を食べさせ母親の入院費を払うため、梶本さんは進学を諦め働きました。

被爆体験について長らく口を閉ざしていましたが、2001年から被爆体験証言者として活動しています。

中学生の梶本さん



「大芝公園へ負傷した友人を運ぶ」井上達也
所蔵：広島平和記念資料館

「瓦礫の街」　長通恵
所蔵：広島平和記念資料館